

宇都宮美術館 コレクション展特集展示 辰野登恵子 愛でられた抽象

2016年7月31日(日)～9月4日(日) 主催 宇都宮美術館

全国の美術館で開かれる回顧展 (こんな作家はめずらしい。)

辰野登恵子没後2年、描き残した絵画たちは益々その存在感と重要性を高めている。宇都宮美術館は20点の辰野作品を所蔵し、今回はその作品を中心に、1970年代の初期作品から2012年パリで制作したりトグラフ作品まで全43点の作品で、辰野登恵子の絵画への取り組みを回顧する展覧会である。

辰野登恵子と二葉百周年 (ロビーの絵を生徒たちは見ているだろうか。)

二葉高校は創立百周年記念事業として、辰野登恵子先生より「UNTITLED97-6」をご寄贈いただき、玄関ロビーに設置した。右の壁面は辰野氏のために残しておいたものだ。100周年にはぜひとも辰野氏の絵画を望む声が大きくなった。具体化して下さったのは、実行委員長の笠井嘉代子氏であった。最終打合せに辰野氏のアトリエを訪ねた折、今回展示の「Spet23」とどちらかというご意向であった。(写真) 寄贈いただくやりとりの中で、「セレモニーはいらない。ある日そこに絵があった、というのがいいのよ。」「生徒が様々に感じてもらいたい。」などの言葉が印象に残っている。感謝状、式典招待はすべて辞退された。



いざ、宇都宮美術館へ（笠井元会長が車を手配して下さいました。）

宇都宮美術館より同窓会宛て招待状をいただき、8月10日（水）百周年記念事業実行委員長であった笠井嘉代子様、私ども同窓会役員3名（竹花、小林佐江、小林真里枝）は、片道300キロを馳せ参じた。



美術館は広大な森の中にあり、高名な岡田新一氏の設計になる素晴らしい空間であった。3章からなる展示はその生涯の変遷を辿ることができ、表現の軸がぶれていないことに驚き、改めてのその偉業に感動した。田舎の女子高の二葉から、難関中の難関、東京芸術大学に現役合格するすごさ。若くして抜きん出た才能を輝かせながら駆け抜けた64年の生涯。二葉はなんとすごい画家を輩出したことだろうか。

主任学芸員 福島文靖氏との懇談（遠くからきた私たちを迎えてくれました。）

優れた美術史家である福島文靖氏。展示の企画が素晴らしく、パンフレットの文章がまた立派である。応接室に通されて、いろいろ教えていただいた。「彗星のように現れた」辰野氏に学生時代から注目していたという福島さん。本当にありがとうございました。（竹花光子 記）

